

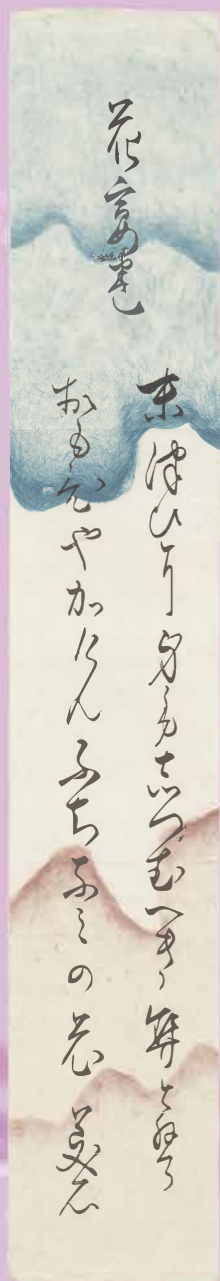
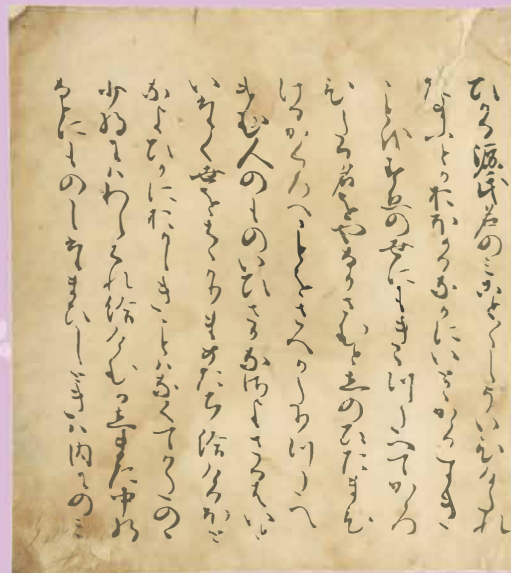
愛知大学総合郷土研究所企画展

源氏物語のゆかり展

―三河・尾張・南信の古典籍と文物―

『源氏物語』は、今からさかのぼること千年、紫式部によって書かれた長編の物語です。今年の大河ドラマ「光る君へ」の主人公は紫式部で、映像の随所に『源氏物語』の作品世界がちりばめられています。今回は三河吉田藩の講釈方・中山美石の和歌短冊（愛知大学総合郷土研究所蔵）や、松坂家旧蔵の『絵入源氏物語』（愛知大学図書館蔵）とともに、国文学者の故藤井隆氏が収集した貴重な鎌倉期を中心とした古筆切など、三河とその周辺地域ゆかりの『源氏物語』関連の古典籍や文物を紹介します。

慶融筆 帚木 六半切 鎌倉期書写（藤井家蔵）



中山美石詠草
（愛知大学総合郷土研究所蔵）



松坂家旧蔵 絵入源氏物語 慶安三年版（愛知大学図書館蔵）

源氏物語

『源氏物語』は今を遡ること約千年、紫式部によって書かれた54帖からなる歌物語である。『源氏物語』の特色は、延べ語数約20万語・異なり語数約1万語からなる語彙の豊富さにあり、原稿用紙約2500枚(100万字)に相当する長編の物語は、795首の和歌が綾なす世界でもある。

4代の天皇の治世約70年余を描いた物語は、藤原氏全盛期の摂関政治のもとで生起した事件と史実を背後に、光源氏の一生と行く末(次世代)に焦点を当てている。作品は、光源氏の華やかな前半生を描く第一部(桐壺～藤裏葉)、翳りのさす後半生を描く第二部(若菜上～幻)、源氏亡き後の薫・匂宮とその周辺を描く第三部(匂宮～夢浮橋)の三部構成となっている。登場人物は400人を超え、その内の50人程が主要人物と見なされる。主人公の光源氏と関係を持つ女性たちは10名を超えるが、それぞれの性質や美しさは、王朝文学を彩る多様な形容詞・形容動詞あるいはその派生語・複合語等を駆使しながら巧みに描き分けられている。妻妾婚制度の軋轢に苦悩しながらも嘆くより他なかった女性たちをリアルに描きつつ、その一方で憑依する「もののけ」(生霊・死霊)が登場するなど古代的側面もそなえている。両者兼備のカオス的特性や重層的に響きあう表現ならびに物語展開、やまと歌と唐の文化を余すところなく汲み尽くし受容・変容した王朝貴族文化の粋こそが、世界に誇る文学遺産《源氏物語の魅力》と言える。

昨今、『源氏物語』への関心は国際的にも高まっており、英語・フランス語・ドイツ語・中国語等(数冊の翻訳)はもとより、世界百数十ヵ国の言語に翻訳されている。享受者や愛好者は、『国宝 源氏物語絵巻』などの源氏絵や物語をベースにした新たな創造への関心と相俟って増加の傾向にある。単に享受するに止まらず、絵画や音楽さらには映画・舞台等に至るまで、常にクリエイティブな創造が試みられている。とりわけ2024年度のNHK大河ドラマ「光る君へ」は、紫式部をモデルにしつつ道長にもスポットを当て、『源氏物語』の特色ある場面をクローズアップしながら現代メディア領域に新たな1ページを加えようとしている。(和田)

源氏物語の絵画化 ～ 国宝 源氏物語絵巻 ～

物語の絵画化は平安時代に盛んになり、『源氏物語』にも物語絵に関する描写がある。『国宝 源氏物語絵巻』は、現存最古の『源氏物語』を基にした絵巻物である。複数存在する源氏絵や『源氏物語』の絵巻物のなかで唯一国宝のタイトルを冠している。料紙の装丁や「^{ひきめかぎばな}引目鉤鼻・^{ふきぬきやたい}吹抜屋台」等の様式、詞書の書風から平安時代



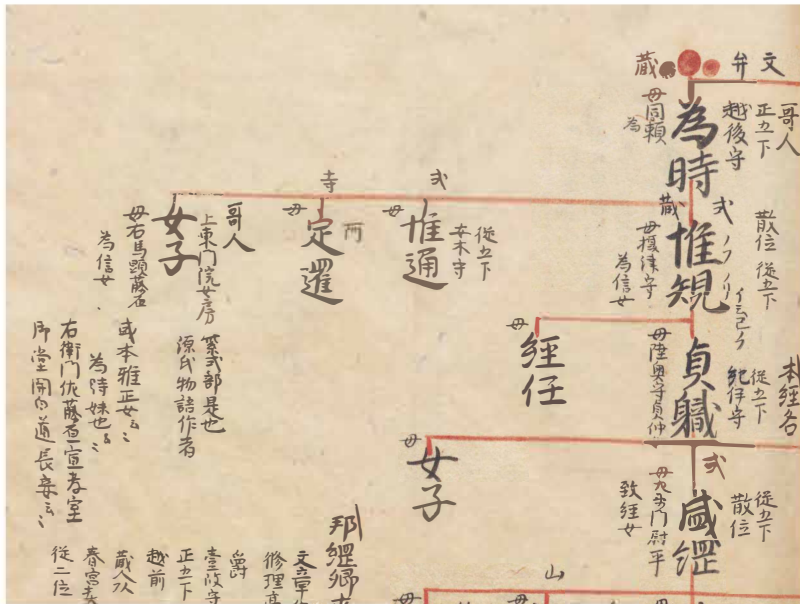
源氏物語絵色紙帖(空蟬) 京都国立博物館所蔵
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

末期のものと見なされる。現存する絵画は、徳川美術館蔵の15面(蓬生・関屋・柏木〔3面〕・横笛・竹河〔2面〕・橋姫・早蕨・宿木〔3面〕・東屋〔2面〕)、五島美術館蔵の4面(鈴虫〔2面〕・夕霧・御法)に、東京国立博物館蔵「若紫」断簡を加えた20面からなる。当初は、54帖それぞれが1～3面から成り、絵画の前に対応する詞書を配した見応えある王朝絵巻であったと推定される。現存する絵画は、歌を詠み交わす場面や特色ある場面が多く、和歌的趣向・物語的趣向に基づき絵画化されている。大和絵の手法に基づく画風は4種、詞書の書風は5種におおむね分類され、1人ではなく複数のグループによる分担制作の賜物と言える。(和田)

紫式部

平安時代中期の女性物語作家で、『源氏物語』の作者。父は漢学者の藤原為時。本名は不詳。「紫式部」は、父の旧官名「式部丞」と、『源氏物語』の登場人物である紫の上とに基づいており、後世の呼称と思われる。長徳4(998)年に藤原宣孝と結婚して娘・賢子を産むが、ほどなく宣孝は急死。その頃から『源氏物語』は執筆

され、高く評価される。寛弘2(1005)年に一条天皇の中宮である彰子に出仕。父の影響で漢籍に明るかったので、彰子に『白氏文集』を教える一方で、同僚から「日本紀の御局」とのあだ名を付けられている。なお、『尊卑分脈』は紫式部を「道長妾」と記す(左の図版参照)が、『紫式部日記』にみえる道長との和歌からは両者の恋愛関係をうかがうことはできず、当該和歌の応答があった夜に式部を尋ねた男は拒否されているため、この説の信頼性は低いとしなければならない。(廣瀬)

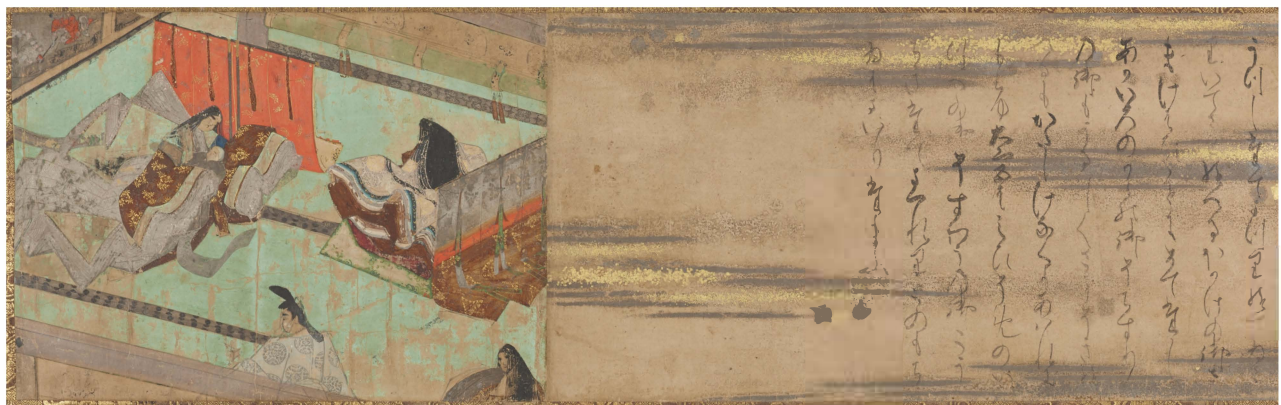


新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集

出典：国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp/file/1271907>)

紫式部日記絵巻

『紫式部日記』を絵画化したもので、絵の様式や料紙・装飾から鎌倉時代初期のものと見なされる。『紫式部日記』は、寛弘5(1008)年秋から7年正月までを記した『源氏物語』の作者の日記である。現存する詞書と絵の各24段は、絵巻4巻の形で江戸時代の大名家に伝来し、現在は藤田美術館・五島美術館(ともに国宝)を中心に数箇所に分蔵されている。当初は現在の2倍を超える50～60段、10巻ほどのものであったと推定される。『国宝 源氏物語絵巻』に代表される物語絵や装飾の手法を受け継ぎながら、構成・色感・人物描写・金銀泥の効果を利かせた風景表現に鎌倉時代の新しい特色が認められる。(和田)



紫式部日記絵巻断簡 東京国立博物館所蔵

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

大河内松平家所蔵 定家本 源氏物語 若紫

大河内松平家とは、源平合戦に敗れた源三位頼政の孫が三河国大河内郷に來住して地名を名乗りとし、さらにその末裔が長沢松平家の養子になったことに由来する呼び方である。江戸時代を通じて松平伊豆守家であったが、慶応4(1868)年に本姓の大河内に復した。『定家本 源氏物語』は藤原定家が小女等^(中納言)に書き写させ、自ら校訂した写本で、これまで「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」の巻の存在が知られていたが、令和元(2019)年に、『源氏物語』全54帖のうちの第5帖にあたる「若紫」の巻が大河内家に所在することが確認された。同家に残る明治6(1873)年の『豊橋御道具記』に「寛保三辛酉年⁽¹⁷⁴³⁾松平筑前守様方來^(黒田継高)黄門定家卿御直跡 一若紫卷」という記載がある。幕末・維新の混乱、さらに太平洋戦争の敗戦を乗り越え、現在に守り伝えられて來たものである。(橘)

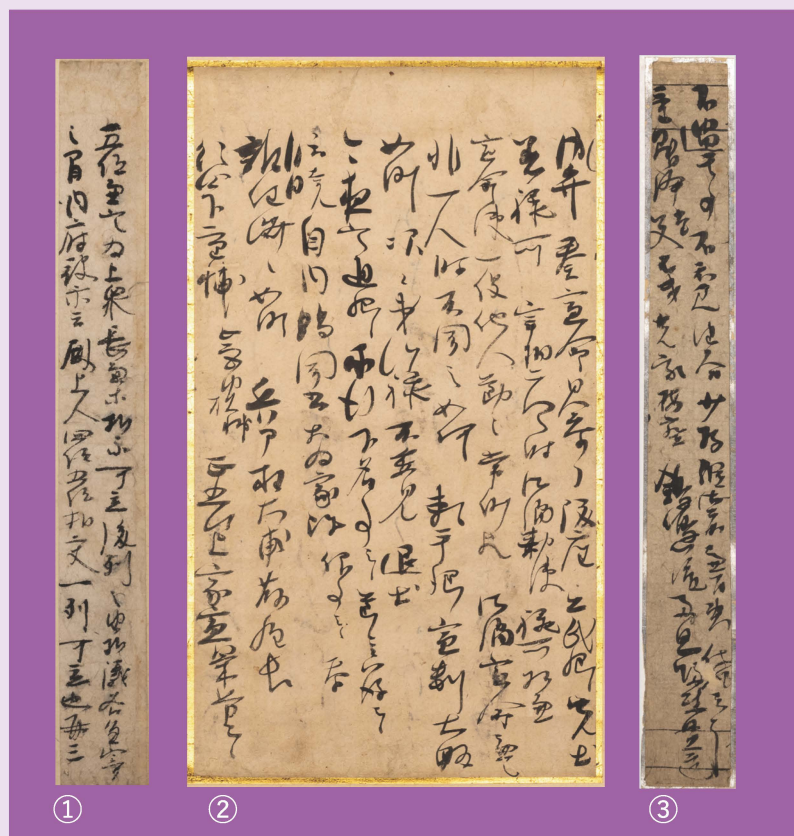
no photo

八木書店『定家本源氏物語 若紫』より

藤原定家の日記 ～明月記～

鎌倉時代前期の公家で、歌人として名高い藤原定家(1162～1241年)は、長年にわたって日記『明月記』を書き続けた。「冷泉家時雨亭文庫」に日記の原本(自筆本)が遺されており、原本のない部分は後世の写本によって補うことができるが、定家の書は価値があるということで、原本の数行分を切り取って観賞に供することも行われていた。ここで紹介するのはこうした古筆切の3点で、①定家41歳、建仁2(1202)年1月1日の日記の一部、②定家52歳、建暦3(1213)年1月16日の日記の一部、③年月日不明の日記の一部である。①と②は写本から年月日を特定できるが、③は写本に見えない新発見の記事で、筆跡からみて②よりあとの時期のものと考えられる。定家の筆づかいは個性的で味わい深いものだが、①→②→③と順に見ていくと、年齢を重ねるとともに筆づかいが変化していく様子がよくうかがえる。

(山田)



(3点いずれも藤井家蔵)

園原の帚木 ～光源氏と空蟬の恋～

長野県下伊那郡の園原は、『源氏物語』の主人公光源氏と空蟬の恋物語の舞台となり、当地の帚木やふせや(伏屋・布施屋「廣拯院」)は物語のモチーフとなる。また「帚木」は54帖からなる物語第2の巻名となっている。当地「伏屋」の「帚木」は、遠くから見えるものの近づけば消える幻想性と相俟って平安貴族に迎えられた。紫式部は、坂上是則の歌「園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」や帚木伝説を背景に、蟬の抜け殻を連想させる空蟬像を造型した。

帚木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな (源氏詠)

数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木 (空蟬詠)

「身の程^{ほど}」を憂えて「あるにもあらず消ゆる^き」空蟬は、『源氏物語』の「帚木・空蟬・夕顔・末摘花・関屋・玉鬘・初音」の7巻に登場する。しかも二人の恋物語は、「負けてやみにしかな」との敗北感を源氏に抱かせ、その後も忘れがたい女性となって源氏の心を占有し続ける。

(和田)



源氏物語図扇面(空蟬) 東京国立博物館蔵

出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>) をトリミングして作成

源氏物語の地名(歌枕)～スタディエリア 愛知・岐阜・三重・静岡・長野～

『源氏物語』には、陸奥・出羽から肥後に至る各地の地名や歌枕が百数十カ所登場する。愛知大学総合郷土研究所スタディエリアにも重要なスポットがあり、美濃や三河・遠江・駿河に比定される地名も存在する(「太

田・貫川」は定説ナシ)。特に信濃の「園原」は、当地の「帚木」が物語の巻名ともなり、光源氏と空蟬の恋物語を紡ぎ出す地名として注目される。また「伊勢」は六条御息所の下向の地であり、源氏須磨退去後の御息所の贈歌にも詠まれている(須磨の巻)。「鈴鹿川」は斎宮に伴って伊勢へ下る時の贈答歌に詠まれ、「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川…」「鈴鹿川^{やそせ}八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせむ」の歌の「鈴鹿川」「伊勢」は、男女の別れの切なさの表象に参与している(賢木の巻)。「伊勢の御息所」は六条御息所の別称で、そののち明石の君の造型へと連なる。

(和田)



愛知大学総合郷土研究所スタディエリアの源氏物語の地名(歌枕)

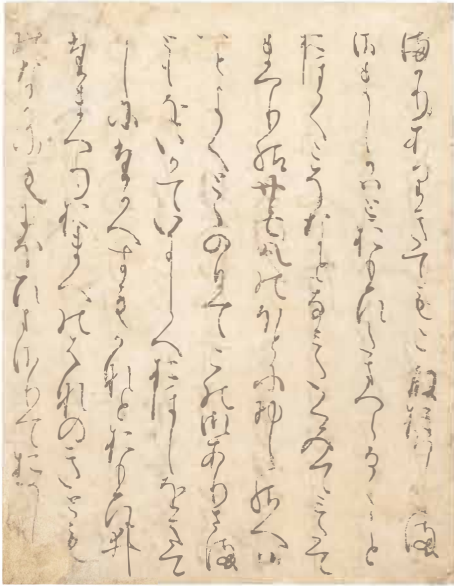
※本図は地理院タイルに地名(歌枕)等を追記して掲載

源氏物語と古筆切

今日、『源氏物語』本文は藤原定家書写校訂の青表紙本がスタンダードとなっているが、これは後代、歌人定家への崇拝が高まるにつれて流布したものである。また、定家自筆本は断片的なものしか伝存せず、今日の書籍の大部分は室町後期の青表紙本系大島本の本文に拠っている。即ち、平安中期成立の作品を室町後期書写の本で読んでいたのである。

翻って『源氏物語』の古筆切には、残念ながら平安に遡る書写の物が無い。鎌倉初、中期ならばかなり古い物となる。しかし古い切の本文は、別本、それも青表紙本や河内本成立以前の、平安に行われていた古い別本の姿を伝えていると言える。鎌倉期、『源氏物語』は多様な本文で読まれていた。古筆切は一枚一枚の断簡ではあるが、中世に人々がどのような本で『源氏物語』を読んでいたのか、その享受の実相を伝える貴重な資料なのである。

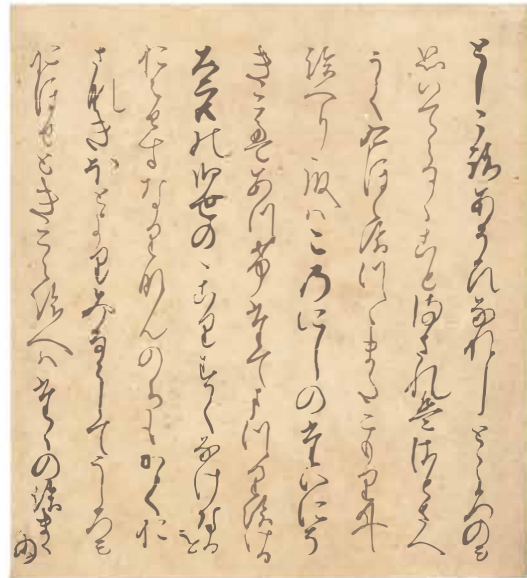
(藤井)



伝阿仏尼 竹河 六半切 鎌倉期書写 藤井家蔵

一面九行。薄い雲母引料紙。書写年代は鎌倉中期にのぼり得る。「竹河」の巻、玉鬘の娘たちが碁を打っている姿を蔵人少将がのぞき見をする場面。本文系統は青表紙本。大島本と一致する。

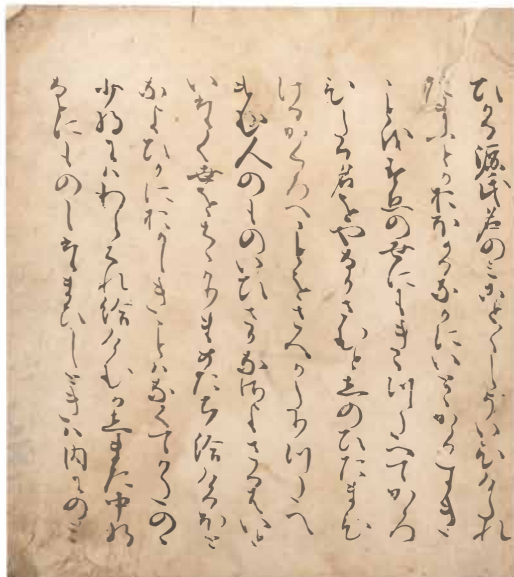
(藤井)



伝藤原家隆 少女 六半切 鎌倉期書写 藤井家蔵

一面九行。料紙は上質の鳥の子(斐紙)。書写年代は鎌倉時代中期を下らないと思われる。「少女」の巻、雲井雁に会えなくなり引き籠っている夕霧を、源氏が花散里に託す場面。本文系統は青表紙本。大島本と一致する。ツレの切はいたって少ない。

(藤井)

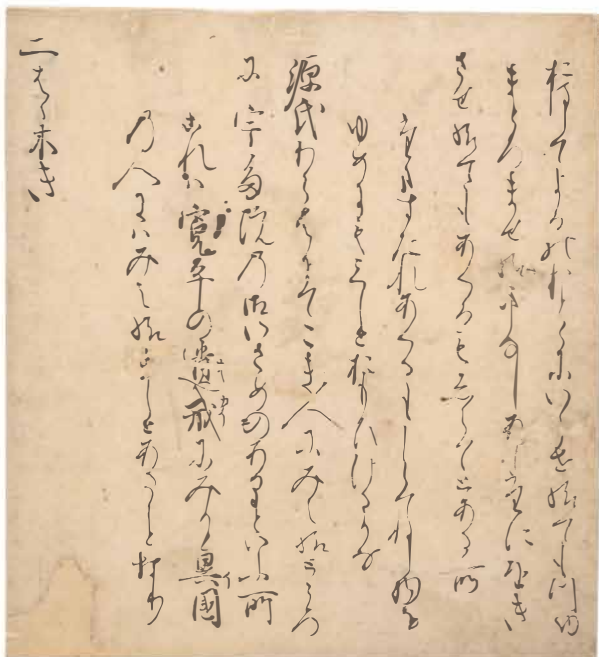


慶融筆 帚木 六半切 藤井家蔵

慶融(生没年未詳、1303年頃存命)筆。慶融は藤原為家の子で、二条為氏の弟。仁和寺の法眼となり、『続拾遺集』撰集の時、為氏を助けて和歌所の開闔(かいこう:次官)となった。

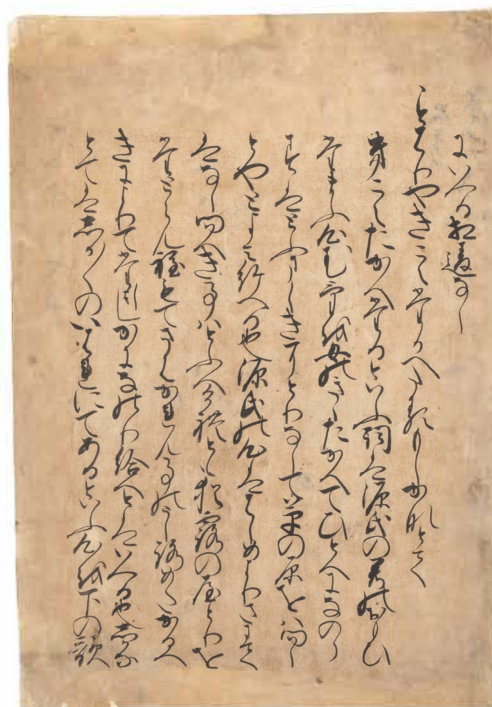
本文系統は青表紙本系。静嘉堂文庫の伝冷泉為秀筆本に近いと思われる。ツレは十点ほどあり、全て「帚木」の巻から切り出されている。この切は「帚木」の巻の冒頭部分に当たる。

(藤井)



伝冷泉為相 源氏釈 六半切 鎌倉期書写 藤井家蔵

書写年代は鎌倉時代末。『源氏釈』は現存する最古(世尊寺伊行著、平安時代末期成立)の『源氏物語』注釈書で、平安時代の『源氏物語』享受がうかがわれる。冷泉家時雨亭文庫に鎌倉時代中期書写の一冊が伝わる。この切は、「桐壺」の巻の終りの部分。(藤井)



伝牡丹花鳥 花鳥余情 四半切 室町期書写 藤井家蔵

書写年代は室町時代中期。『花鳥余情』は一条兼良が著した注釈書(1472年成立)。出典考証中心の『河海抄』の補正を意図したもので、文意・文脈の注解に特色がある。後世への影響が大きい。この切は「花宴」の巻の源氏の言葉「ことはりやきこへたまへたるもじかな(ことわりや。聞こえ違へたるもじかな)」についての注釈箇所。(藤井)

源氏物語の諸本・伝本

現在、私たちが読んでいる『源氏物語』は紫式部が書いた原典そのものではない。寛弘5(1008)年の『紫式部日記』の記事によって、当時すでに「草稿本」「改稿本」があり、式部の意に反して草稿本も流布してしまったことが分かる。これらは版本が登場するまでの長い間、書写という方法で伝えられた。当然誤写がおり、また意味が通るように改められるということもあって、もとの姿を完全に留めていない。室町時代末までに書写された伝本は100を超え、これらは青表紙本・河内本・別本という3つの系統に大別される。

青表紙本とは

藤原定家が元仁2(1225)年前後に証本と定めた本文。その表紙が青であったことから青表紙本という。

河内本とは

源光行・親行父子が、嘉禎2(1236)年頃に、21種の伝本を校合したもの。河内本という呼称は、光行・親行父子が河内守であったことに由来する。

別本とは

青表紙本・河内本どちらにも属さない、または青表紙本・河内本の混成本あるいは改竄本。このなかには青表紙本や河内本に近い本文もある。

源氏物語の享受の広がり～ 平安から近世へ～

近世以前、『源氏物語』は公家や武家などほんの一部の教養層で享受されるのみであった。それが近世はじめに版本が登場したことで、公家から庶民まで幅広い階層の人が『源氏物語』を楽しむことが出来るようになった。慶長古活字本や慶安3(1650)年版の『絵入源氏物語』(慶安本とも言う)はその先駆けで、特に慶安本は挿絵・ふりがな・傍注などを付けることで読みやすく、版元や形を変えつつ幾度も版を重ねた。その後『万水一路』『首書源氏物語』『湖月抄』『玉の小櫛』などの注釈書や『源氏小鏡』などの梗概書が出版された。また大和絵・浮世絵・華道・和歌・香合わせなどさまざまな分野でも題材となり、『源氏物語』は近世期においても人々に愛され続けた。

(荒木)

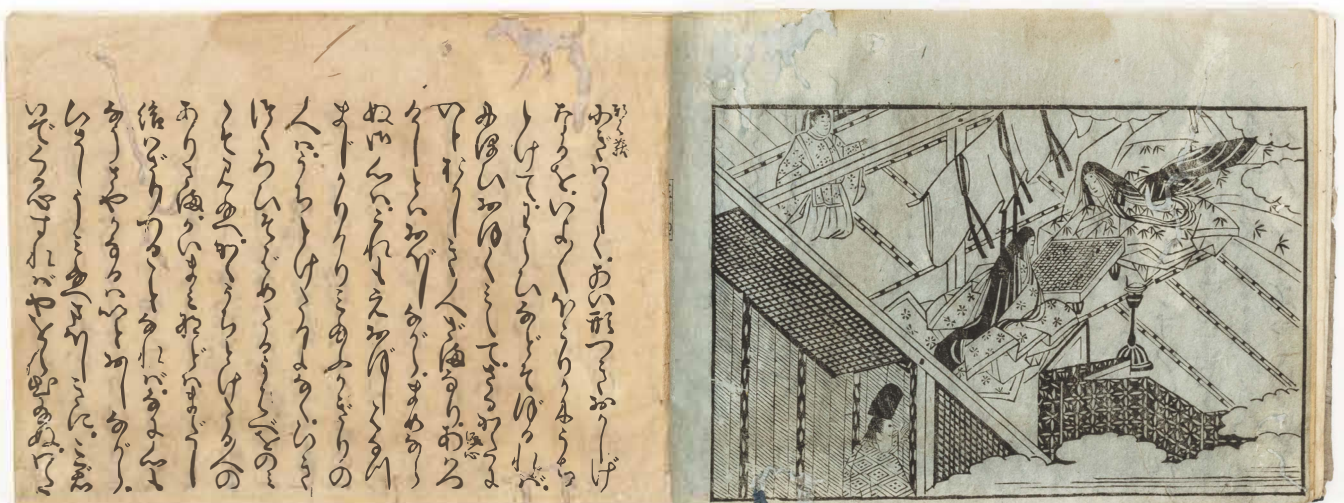


源氏物語絵帖 断簡

藤井家蔵

伝住吉如慶筆。製作年代は江戸時代初期(寛永明暦頃)。『源氏物語』54帖から各帖一場面ずつ選んで描き、画帖に貼り込んだものと思われる。白描(墨の線と濃淡を主体とする)大和絵で、口にのみ朱をさす。雲には金銀を使用した本格的な源氏絵。

(藤井)



絵入特製本(原装)

藤井家蔵

「空せみ ゆふかほ」万治3(1660)年刊行。五色紙刷。『万治本』とも言われる。本文系統は青表紙本系で、三条西家本系統の本文に近い。本文には注などを施して読みやすくする工夫が加えられている。挿絵は、編者の蒔絵師山本春正によると見られる。

(藤井)



松坂家旧蔵 絵入源氏物語 慶安3(1650)年版 愛知大学図書館蔵

『源氏物語』最初の絵入り版本。編者は蒔絵師・歌人の山本春正。春正による226枚の挿絵や版本の特徴は、以降の版本に大きな影響を与えた。54帖が後世に20冊に合冊されている。別冊付録として『源氏引歌』『山路の露』『源氏目案』『源氏系図』がある※。

三河吉田藩の御用達松坂家の旧蔵本だが、同家に渡ったのは慶応3(1867)年以降で、その前は安海熊野神社(愛知県豊橋市魚町)神主鈴木家が所蔵していた。大部分の題箋は張り替えられているが、「わかな 下」には元来の題箋が残っており「三河国吉田方 神主 熊野鈴木」と印がある。松坂家の蔵書目録によると、『源氏物語』関連の書籍として『紫式部日記』のほか『湖月抄』『源註拾遺』『玉の小櫛』などの注釈書も所蔵していた。(荒木)

※松坂家旧蔵本は『源氏系図』を欠く



松坂家旧蔵 源氏引歌 慶安3(1650)年版 愛知大学図書館蔵

『絵入源氏物語』(慶安3年版)の付録に収められた引歌本。すでに知られている和歌を踏まえた表現をすること、また、その踏まえられた和歌を引歌と呼ぶ。引歌表現からもとの和歌全体の意味を想起させることで重層的に文意を豊かにする効果がある。平安末期以降、数々作られてきた『源氏物語』の注釈のなかで引歌の考証が続けられた。『絵入源氏物語』では、本文の引歌の箇所に「ゝ」のしるしを付け、踏まえられた和歌をこの『源氏引歌』に列挙した。全1冊。(早川)



松坂家旧蔵 山路の露 慶安3(1650)年版 愛知大学図書館蔵

『源氏物語』の補作の1つ。浮舟は入水自殺をしたと皆が思っていたところ、実は助けられて尼になっていた。彼女に心惹かれていた薫はそれを知り、手紙を送るが、浮舟は取り合わない。このまま『源氏物語』は終わってしまう。“この続きが知りたい”と、後世に創作された物語の一つが『山路の露』である。作者は不詳だが、一説には、建礼門院右京大夫による平安末期の著作と推定された。『絵入源氏物語』付録に収められたことで、広く読まれるようになった。『山路の露』では、薫はひそかに浮舟のもとを訪れ、はじめは隠れていたが、こらえきれずに姿を現し、胸中を語り、和歌を詠み交わす。後日、浮舟の母も彼女と再会するが、浮舟は自らの身の処し方を変えようとはしなかった。全1冊。(早川)



松坂家旧蔵 湖月抄 藤井家蔵

『湖月抄』は北村季吟著、延宝元(1673年)年成立。全60巻(『源氏物語』55巻[「雲隠」を含む]、発端1巻、系図1巻、年立2巻、表白1巻)。それまでの『源氏物語』注釈書の集成的性格を持ち、江戸時代を通じ最も流布した『源氏物語』の版と言われ、大きな影響力を持った。(藤井)



菅沼家旧蔵 玉の小櫛 愛知大学図書館蔵

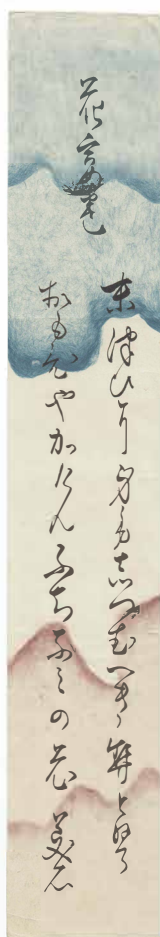
本居宣長による『源氏物語』の注釈書。全9巻。寛政8(1796)年成立。1・2巻は宝暦13(1763)年の著作『紫文要領』をベースに書かれ、40年に及ぶ宣長の『源氏物語』研究の集大成ともいえるべき著書である。

本書を旧蔵していた菅沼家は、三河国八名郡乗本村(愛知県新城市乗本)で回漕業を営み、日本各地に取引先を有していた。宣長の著書も多数所有し、また門下生の加藤長左衛門廣當との間で和歌や漢詩のやり取りもなされ、それらを通じて宣長の影響を受けていたと考えられる。(田中)

花宴

末つひに身もしつむへき契とは
おもひやかけんふちなみの花

美石



花宴巻

末つひに身も沈むべき契とは
思ひやかけん藤波の花

美石

中山美石和歌短冊 愛知大学総合郷土研究所蔵

中山美石^{うまし}(1775~1843年)は三河吉田藩士で国学者・歌人。郷同心として勤める傍ら学問に励み、文化14(1817)年、藩校時習館講釈方に取立てられる。文政2(1819)年、藩主松平信順に「桐壺」の巻を進講。また鈴木胤の注釈本『少女巻抄注』に跋文を寄せるなど『源氏物語』への造詣も深い。門人に加納諸平・本居楠吉(大平の4子)などがいる。

(荒木)

はなのえん
「花宴」は「南殿の桜の宴せさせたまふ」による『源氏物語』54帖中の8帖の巻名。この短冊は、「花宴」の巻を読んだの詠。歌は、右大臣家での藤の宴に招かれた源氏が、「藤」の花に寄せて藤壺を思いつつ朧月夜と密会する場面の物語表現や、朧月夜とひそかに契った時の源氏の歌「深き世のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ」を踏まえている。「花宴」の巻のテーマを読み解いた美石の一首である。(和田)

〈参考文献・資料〉

- ・愛知大学総合郷土研究所蔵 三河国八名郡菅沼家文書 史料番号 200 漢詩
- ・大村重由述『中山美石小傳』東三文化研究会 1935 年
- ・池田亀鑑『源氏物語大成』巻一、巻七 中央公論社 1953 年、1956 年
- ・山崎良幸『源氏物語の語義の研究』風間書房 1978 年
- ・片桐洋一監修・ひめ松会編『平安和歌歌枕地名索引』大学堂出版 1972 年
- ・阿智村誌編集委員会編『阿智村誌』上中下巻 1984 年
- ・鈴木淳・岡中正行・中村一基編著『本居宣長と鈴屋社中 『授業門人姓名録』の総合的研究』錦正社 1984 年
- ・藤井隆・田中登著『国文学古筆入門』和泉書院 1985 年、続 1989 年、続々 1992 年
- ・工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』風間書房 1994 年
- ・田島毓堂『源氏物語絵巻詞書総索引』汲古書院 1994 年
- ・中野幸一編『常用 源氏物語要覧』武蔵野書院 1995 年
- ・秋山虔・小町谷照彦編『源氏物語図典』小学館 1997 年
- ・小町谷照彦『王朝文学の歌ことば表現』若草書房 1997 年
- ・狩野博幸ほか『京都国立博物館所蔵 源氏物語画帖』勉誠社 1997 年
- ・田中登『古筆切の国文学的研究』風間書房 1997 年
- ・林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房 1998 年
- ・角田文衛・加納重文『源氏物語の地理』思文閣 1999 年
- ・藤田加代『源氏物語の「表現」を読む』風間書房 1999 年
- ・山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈』一・二 風間書房 1999 年・2000 年
- ・玉井力『平安時代の貴族と天皇』岩波書店 2000 年
- ・田中登編『平成新修古筆資料集』思文閣出版 2000 年、第 2 集 2003 年、第 3 集 2006 年、第 4 集 2008 年、第 5 集 2010 年
- ・伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史 事典』東京堂出版 2001 年
- ・清水婦久子『源氏物語版本の研究』和泉書院 2003 年
- ・久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社 2006 年
- ・日向一雅編『源氏物語と平安京 考古・建築・儀礼』青簡舎 2008 年
- ・和田明美『古代東山道園原と古典文学』あるむ 2010 年
- ・清水婦久子『国宝「源氏物語絵巻」を読む』和泉書院 2011 年
- ・久曾神昇編『語り継ぐ日本の歴史と文学』青簡舎 2012 年
- ・宮島達夫他編『日本古典対照分類語彙表』笠間書院 2014 年
- ・鈴屋遺蹟保存会本居宣長記念館編『宣長の版本』本居宣長記念館 2015 年
- ・田中登編『古筆の楽しみ』武蔵野書院 2015 年、続 2017 年
- ・羽田野敬雄研究会『中山美石書簡集』2018 年
- ・大河内元冬・藤本孝一『定家本 源氏物語 若紫』八木書店 2020 年
- ・豊橋市美術博物館『吉田城と三河吉田藩』2020 年
- ・上原作和『紫式部伝』勉誠社 2023 年
- ・伊井春樹『紫式部の実像』朝日新聞出版 2024 年
- ・田中登・横井孝編著『源氏物語の古筆の世界』武蔵野書院 2024 年
- ・伴瀬明美「紫式部の人生をたどるには」(『歴史評論』第 885 号 2024 年)

〈凡 例〉

- ・この冊子は 2024 年 9 月 21 日～10 月 30 日まで愛知大学記念館で開催する「源氏物語のゆかり展―三河・尾張・南信の古典籍と文物―」の展示図録である。
- ・「源氏物語のゆかり展」の実行委員および図録編集委員は以下のとおり(50 音順)。各解説文の末尾に執筆担当者の姓を記した。
荒木亮子(当研究所研究員) 樫村愛子(本学文学部教授) 神谷智(本学文学部教授) 近藤暁夫(本学文学部教授)
須川妙子(本学文学部教授) 橘敏夫(本学非常勤講師) 田中博久(当研究所研究員) 秦俊一郎(本学学術支援事務部長)
早川駿治(当研究所臨時職員) 廣瀬憲雄(本学文学部教授) 藤井奈都子(本学非常勤講師) 山田邦明(本学文学部教授)
和田明美(本学文学部教授)
〔資料撮影〕上田謙太郎(本学文学部准教授)

〈謝 辞〉

本展覧会の開催および本書の作成にあたり下記の方々にご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

愛知大学図書館 五島美術館 徳川美術館 豊橋市美術博物館 はゝき木館 八木書店
大河内元冬 久住祐一郎 島田美津穂 下野正俊 鄭智允 鋤柄澄子 藤井奈都子 藤井憲隆
「源氏物語のゆかり展」サポートメンバーの方々 (50 音順、敬称略)